

## トライアスロンイン上五島2019

大阪府 坂口 晃一

頸椎ヘルニアの手術から3年が経過し、今年こそレギュラーの部での出場を目論んでいた。しかしながらランにおける脚の状態が思わしくないため、今年もリレーの部での参加となった。

僕はこれまでどおりバイク担当。ランを担当してもらうのは昨年まで一緒に組ませてもらっていた地元の山下君だ。そして、スイム担当は事務局の浅上先生にお願いして選んでいただいた福岡の長谷川さんとなった。長谷川さんはこれまで長崎県のレースで何度も一緒にさせていただいている長谷川さんの奥様で、これまで何度かお会いしたことがある方だった。(…というのはお会いして気づいたことだが…)

「決まってから練習を始めたんで遅いですよ～」

と恐縮しきりの長谷川さんだったが、それもそのはず…スイム担当はそれぞれ違う人だったものの、僕らのチームはリレーの部二連覇中だった。おまけにチーム名も「昨年優勝」(事務局でつけてくれた)である。もちろん走るからには優勝するのが目標だが、ここ上五島に来た第一の目的は「仲間とレースを楽しむこと」なのだ。

「遅くても僕らでカバーしますからマイペースで行きましょう！」

レース当日朝は少し雨模様だったが、トランジットエリアに向かう頃には雨は止んで路面もすっかり乾いていた。これなら何とか1日もちそうだ。

午前9時にスイムがスタートし、ほとんど波のない漁港の湾内を選手が泳ぎ出して行く。スイムトップは島根の松本華奈さんで、今年の招待選手だ。タイムは34分ほど…長谷川さんが来るにはもう少しかかると思うが、他のチームの動向もあるためリレーゾーンで待つことにした。

40分が経過しようとしていた頃に、リレーの部スイムトップの選手が上がってきた。続けて2位の選手も大差なしに上がってきていた。事前情報によると、今年はスイムとランに強豪をそろえたチームが優勝を狙ってきているらしい。ということはバイクがウィークポイントということになるので、僕の走りが重要になってくる。そう思いながら待っていると、まさしくそのチームのスイム選手が上がってきた。

それまでは他のチームとのタイム差はさほど気にしていなかったが、明らかにライバルとなるであろうとわかっているチームを目にしたからには意識せざるをえない。のんびりムードで待っていたところから、精神的にギアチェンジしたような気がした。

そこからも次々とリレーの部のスイム選手が上がってくる。リレーゾーンで待機する選手は僕を含めてあと3人になっていた。長谷川さんの姿はまだ見えないが、50分は超えるだろうと予想していたのでここまでは想定内だ。

スタートから50分が経過しようとしていた頃、思ったよりも速く長谷川さんが上がってきた。この時点で8位、タイム差は約10分だ。1位でランにつなぐのは厳しいが、調子は昨年と比べてかなり良くなってきている。少しでも順位を上げるべく走り出した。

アップは十分にしていたので、序盤から走りは軽く感じる。墓場の前の急坂をクリアし、ヘアピンで加速しながら鍋倉峠を上る頃には先を行く選手を何人か捉えることができた。次に控える白魚峠は序盤が緩やかで、鍋倉峠からの下りの勢いで走ることができるが終盤は勾配がきつくなる。頂上にはエイドがあり、地元高校生がボランティアで声援を贈ってくれていた。その声援に応えるべく頂上まで一気にダッシュすると心拍数は早くも170を超えていた。

白魚峠を下ってから続く海岸線沿いのアップダウン区間でも、先を行く何人かの選手を捉える。リレーの選手も何人か抜いているが、ある程度の実力がある選手はまだまだ先を走っているはずだ。優勝を狙うには少なくとも2周目の米山に入る手前の坂で追いついておきたいところだった。とはいってもまだ1周目である。はやる気持ちを抑えながら米山を目指した。

昨年の失速が頭にあったので、米山への上り始めはギアをこれまでよりも1つ軽くして慎重に臨む。山頂へと至る道には広い木陰になっている所が3か所あり、それぞれに急傾斜が待ち構えている。そして最後の3つめの木陰の斜度が一番きつくなるのだ。去年はそこで時速10kmを割り込まないようにするのが精一杯だったが、今年は若干脚に余裕があった。心拍数は再び170を超えてきたが耐えられない負荷ではなかった。

頂上手前のエイドを過ぎ、少し上ったところから長い下り区間に入る。ここで勢いを殺さずに走ることができれば、後半の上り区間はわずかとなる。時速65kmを超えるスピードを維持しつつ、前を走る選手に追突しないように慎重に走った。

2周目に入ると追い抜くのは周回遅れとなった選手ばかりとなった。リレーの選手には追いつかない。米山の手前の坂でようやくひとりリレーの選手を追い抜いた。事前情報にあったスイム・ランの実力者をそろえたというチームの選手である長崎の田代さんだ。

「ああ～ここで追いつかれたか～！」

スイムのタイム差から考えると追いつくのはもう少し先かと思っていたが、これは良い

意味での想定外である。

「もしかしてこれで1位？」

そんな思いも頭をよぎったが、まだ取りこぼしている気がする。米山に入る直前に追い抜いた選手の一人に

「今何位？」

と聞かれて

「たぶん1位…？…いや、違うかも？」

きちんと数えていたわけではないので正確にはわからないのだが、不思議なことになんともなくわかる。

米山に入って勾配がきつくなる2つ目の木陰で、リレーの選手に追いついた。これで1位かとも思ったが、手応えからしてまだ先にいるように感じる。勾配がきつくなる3つ目の木陰では徐々に心拍数が180まで上がっていた。少し無理をしたせいか、若干脚にきたように感じたが残りはほとんど下りだ。油断すると痙攣がきそうだったが、下りの勢いを殺さない走りでもやり過ぎた。

米山を下りきって、バイク周回とフィニッシュの分岐点を右折すると港へ向かう道に出る。港の前に差し掛かるとき、ようやくリレーの選手に出会った…しかしそれはバイクではなくランの選手だった。やはり1人先行していたのだ。距離はランスタートから推測で約1kmちょっとの地点…少なくとも10分以上は差がついていると思われる。ランの選手の足取りも、快調とまではいかないが決して悪くはない。

「今年もまた山下君頼みか…」

一瞬そんな思いがよぎったが、ここまでの走りは決して悪くはない。相手が速かったのだと考えを切り替えてバイクフィニッシュを目指した。

結局昨年より2分ほど速いタイムでフィニッシュし、あとをラン担当の山下君に託す。少し練習不足だと言っていた彼だったが、颯爽とした足取りで前を追って走っていった。

ランコースは一度フィニッシュ近くまで戻ってきてから折り返し、あこう樹のところまで行ってからまた港へ向かって走っていく少し変則的なコースだ。しばらく待っているとリレーの部トップの選手が帰ってきた。山下君とのタイム差を計る。昨年は確かこの時点で3分ほどの差だったはずだが、3分経過してもまだ山下君の姿は見えない。

山下君が折り返し地点まで帰ってきたときに、トップとの差は5分ほどとなっていた。残りの距離を考えれば逆転は難しいが、一時10分以上はあったと思われる差をここまで縮めてきたのはさすがだ。

結局トップのチームはそのままフィニッシュし、少し遅れて山下君が帰ってきた。三連覇こそ逃したものの、自分自身としては昨年のふがいない走りを思えば十分な結果だったと思う。

来年こそはレギュラーの部で…と毎年のように思っていたのだが、一昨年にチームを組ませていただいた長崎の稲岡さんから、来年は当時のチームでもう一度リレーの部に出場したいとの申し出があった。決してリベンジというわけではないが、脚の状態が不安定な中ではそれがベストの選択だと思われる。そして何より楽しむことが一番！しっかりと準備して来年の大会に臨みたいと思う。